

れて来た。

昭和二十一年の二月に帰れるとか、六月に帰れるとかの話が出たが、なかなかその実現がむずかしかった。それで最後はシンガポールに集結して、やっと昭和二十一年十一月中旬に輸送船が迎えに来て乗船し、途中台湾経由し、十二月五日、佐世保港に上陸し、懐かしい高知へ復員することが出来た。

ラバウルの想い出

愛知県 高橋 正 己

昭和十八年五月十八日、豊橋予備士官学校の雇員として働いていた私に召集令状がきた。

当時二十八歳の青年でした。翌日、豊橋の中部第六二部隊に入隊、朝六時起床、夜九時消灯の生活を一週間続けたら、連隊長の乗馬姿を先頭に勇ましく進軍ラッパを吹いて隊伍を整えて豊橋駅まで行進し、小学生の音楽隊吹奏のなかを広島に向かった。

そこで一週間待機し、呉から輸送船十一隻が巡洋艦、駆潜艇等に護衛され玄界灘を渡り台湾に寄港、マニラを経てセブ島で教育のため三か月滞在、パラオ島を経由、目的地ラバウルに到着した。その間の二十日間は赤道直下のため船内の温度は急上昇し、まるで「ムロ」に入ったようだった。

甲板に出れば鉄板は焼けてやけつくようで、とても寝られたものではなかった。敵の魚雷監視は昼夜を分けず続けられた。

当時のラバウルの状況は、まだ良かった時で、軍艦・船舶約七十隻、軍用機二百機、食糧は五か年分があるとのことでした。

上陸してから十日目にB29が百機編隊で来襲、二百五十キロ爆弾二百発を雨あられと投下した。我軍飛行機も直ちに応戦のため飛び上がった。爆弾が機体から離れた時は小さく見える弾が、見る見る大きくなって落ちてくるのを私は山の上から見上げていたが、滞在中の我が戦艦、巡洋艦から射ち上げる対空砲火の流れ弾が射ち込まれ、敵味方の十字砲火にさらされて、

兵隊の肉片がとびちり、衣服が樹に引っかかるなど悲惨な姿でした。

敵機の去ったあとには滑走路には畳十帖ぐらいの穴があちこちに開き、友軍機は降りるに降りられず他の飛行場に着陸する始末です。

このような空襲は一日に三回ありました。高射砲で射つても当たらず、そのうちに上空が敵戦闘機で真黒になる程来襲するようになり、毎日爆撃と機銃掃射に襲われ、防空壕に待機する日が続きました。

部隊陣地は山の上でありましたが、爆撃のため壕の入口が塞がれる恐れが出てきたので必ず「円ピ」を持って入りました。しかしラバウル湾に面した西吹山の陣地の他の部隊では、防空壕が爆撃のため潰され、百五十人が死んだと聞いています。

ある日、中隊命令でラバウルの東北方にあるニューブリテン島の中央部にあるラトブという処に繋船場の偵察を命ぜられ、松浦少尉以下十五名が重機関銃一挺と各自小銃を携帯して上陸用舟艇に乗り、暗夜、雨の中を出発しました。しかし風波が強くなってきたため

に途中の小島に停泊していたら、土人が「向うの小屋にアメリカの操縦士がいる」と通報してきた。

そこで松浦少尉、稲兵長、私・高橋上等兵と兵隊一人の計四人が土人の案内で、その小屋に接近し、稲兵長が一発空に向けて射つと二名の米操縦士が手を挙げて小屋から出てきた。拳銃と食糧を取り上げたが射ち合いにならなくて良かったと思った。

操縦士は故郷の妻に捕虜になったと電報を打つてくれたと言った。私は外人は陽気な人類だなアと思った。

翌日、目隠しをして本部に送ったが、その後どうなったか知らない。繋船場偵察は、後日、再び命令が出て他の兵隊が出掛けたが、途中、空襲にあい全員戦死との事だった。

私は捕虜を捉える時に右足に負傷して、中隊がカビエン沖に移動の際は同行できず、熊本第六師団に合流し駐屯地・南崎に残留しました。

その頃、ガダルカナル島の水先案内人に行くように命令が出たが、私は丁度四十一度の高熱が出て鈴木軍医から止められ、代わりに他の兵隊が行ったそうです。

しかし敵機の爆撃を受け全員戦死しました。

「高橋も危ない」とのこと中で中隊から見舞いに来てくれましたが、運悪く空襲にあい、私は逃げることも出来ず防空壕の入口で寝ていたらしく踏まれました。その後防空壕で療養生活に入り食事も兵隊が持ってきてくれて嬉しかったです。

ラバウルも重なる敵の空襲で飛行機も食糧も無くなり、四か所も飛行場がありながら日の丸機を見ることはありませんでした。

戦況は日増しに悪化し、本部連絡は「食糧尽きて草根噛み、徒手空拳よく敵をかみ殺すべし」とありました。

食糧がないため一年余の間は芋椰子の新芽の皮をむいて食べたり、椰子のコブラ油をとり、海水を汲み煮込んで塩をとったりしました。また、靴の代用に自動車タイヤで草履をつくったりしました。

私は伍長勤務兵長として高射砲教育を受けるため前川中隊長と共に第八方面軍司令部に赴き、今村軍司令官の訓示を聞きました。その後まもなく終戦の詔勅を

聞き旗が立ちました。敵が上陸してくれば敵陣に突入して死ぬ覚悟だったのにとても残念でした。

終戦後一か月は山奥に入り、戦死した戦友の骨を木箱に入れて十二柱を埋めました。命令で山奥から夜中の二時頃トラックで海岸に出て、上陸してきた米軍に武装解除されました。早速、作業につかせられ、兵器類を海中に投棄する仕事を十五人の米兵が自動小銃で見張る中で続けました。のどがかわいても飲み水がないのでスコールがくるのを待ちかまえて飲んでしのぎました。

昭和二十一年五月二十一日、名古屋港に帰着、復員した時五百円が支給されました。

私は召集令状を受けてから丁度三年一か月たっていました。その間多くの戦友が傷つき病んで死にました。戦後四十八年経ち二十八歳の青年だった私も七十七歳になり、この先そう長くは生きられないと思います。戦争を知らない若い世代が多くなり大変世の中も変わりました。戦争のない平和な時代がいつまでも続くことを祈って止みません。